

第30回学術集会特別企画 委員会30年の軌跡

冒頭のことば

第30回日本小児整形外科学会学術集会会長

南大阪小児リハビリテーション病院院長

川 端 秀 彦

昨年、令和元年11月21日～23日に「第30回日本小児整形外科学会学術集会」を開催させていただきました。たくさんの先生方にお集まりいただき、盛会の内に終わることができましたことを改めて御礼申し上げます。さて学術集会では、本集会が第30回という節目であることから、特別企画として歴代の理事長に本学会の過去・現在・未来を語っていただく座談会「歴代理事長と語る JPOA30年」と、これまでの各委員会の歴史が記されたポスター「委員会の軌跡」を企画いたしました。メイン会場に隣接して並べられたポスターを多くの会員の先生方が御覧になったことと思います。

われわれの学会には委員会が数多くあり、それぞれが活発に活動しています。歴史の長い委員会もあれば昨今の needs に応じてごく最近に結成された委員会もあります。また、長い日本小児整形外科学会の歴史の中では役割を終えて解散した委員会もあるはずですが、残念ながらその詳細は既にわからなくなっています。委員長といえどもその委員会の歴史を知らずに目の前にある喫緊の課題を解決することだけを考えていることが多いのではないのでしょうか。もちろん喫緊の課題の解決が一番大切ではあるのですが、せっかくの努力の結果や業績が、いずれ時の流れに埋もれてしまうと想像すると非常に残念です。実際、この企画を現委員長の先生方にお願ひしましたときも、資料らしきものが手元にないので委員会の歴史などわからない、ポスターを作成することができないとのご意見を何人もの先生方からいただきました。まさにこのことがこの企画を考えた背景なのです。

それにもかかわらず、最終的にできあがったポスターは各委員会の特徴がよく描かれた力作揃いで、ポスター作成に関わられた各先生が大変苦勞されたであろうことが感じ取れるものでした。これらには若い先生方にぜひ知り置いて欲しい「委員会の歴史」が凝集されていまして、一度限りの展示で終わらせるには惜しいということもあり、理事会のご承認をいただいて『日本小児整形外科学会雑誌』に収載し、ホームページに掲載する運びとなりました。収載・掲載にあたって編集委員会落合達宏委員長、広報委員会藤原憲太委員長には大変お手数をおかけしたと思いますが、このような形で後世にこの企画を残せることを学術集会会長として非常にうれしく思っております。ゲーテは「過去を知らないで現在を知ることはできない」と言っていますし、『論語』にも「子曰温故而知新可以為師矣」とあります。若い先生方も先人の積み上げたものの上に何かひとつつけ加えて下さい。

- * 1 平成2年（1990年）に設立された当学会に「あり方委員会」が設置されたのは平成13年度（松尾隆委員長）である。理事長制を導入するために、平成15年11月22日には制度変更に伴う会則の改訂が行われ、浜西千秋先生を第2代委員長として平成16年度に同委員会が新たに発足した。
- * 2 任期満了による委員全員の交代。第3代委員長として芳賀信彦先生が就任される。
- * 3 第4代委員長として薩摩が就任。学会及び委員会で数年来の懸案事項であった法人化への移行が加速される。平成30年（2018年）2月9日 一般社団法人となる。それに伴い、定款、規程が新規に作成され、副理事長2人体制となる。

委員会業務（過去、現在）

学会全体のあり方に関する検討

- ① 理事長制の導入
- ② 法人化への移行
- ③ 委員会内に男女共同参画キャリアアップ部会を設立

会員数の動向を把握（下のグラフ参照）

会員カテゴリーの検討

- ① 準会員のカテゴリーを追加（平成24年度～）
- ② 賛助会員のカテゴリーを追加（平成29年度～）

名誉会員・功労会員候補者を理事会へ推挙

評議員に関して

- ① 新評議員候補者を理事会へ推挙
- ② 評議員の資格失効・継続に関する審議

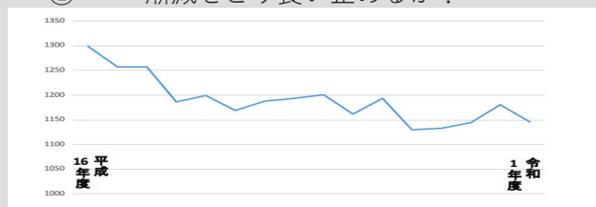
委員会業務（これから）

学会全体のあり方に関する検討

- ① 小児整形外科専門医制度の検討
今年度より小委員会を発足させ新たな検討に入った（理事長、副理事長、西須委員長、および委員）
- ② 公益財団法人化への移行は？

会員数の増加を目指して

- ① 漸減をどう食い止めるか？



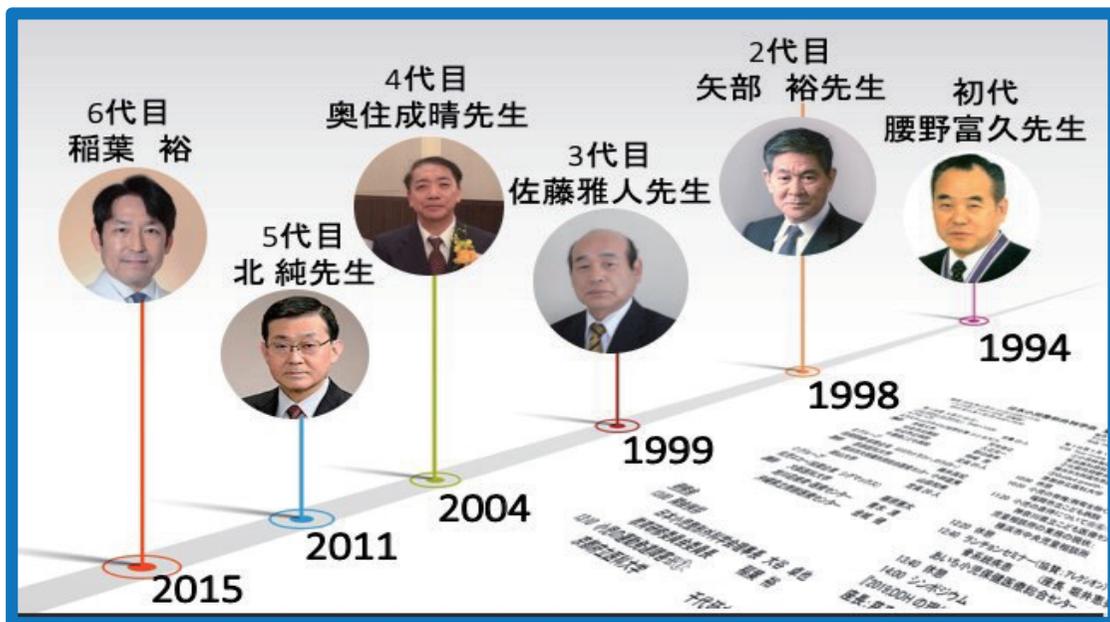
教育研修委員会の軌跡

委員： 稲葉 裕 (委員長) 青木 清 池上博泰 射場浩介 鬼頭浩史
後藤昌子 櫻吉啓介 神野哲也 柳田晴久
アドバイザー： 北 純 金 郁喆 中塚洋一 堀井恵美子

教育研修委員会の設立

日本小児整形外科学会設立4年後の1994年に腰野富久先生が、若い医師が小児を診る機会が少なくなったことを危惧し、村上寛久先生らと教育研修委員会を設立した。他学会に比べ教育研修委員会の設立は古く、学会内で研修の重要性が認識されていた。

歴代委員長



委員会の軌跡

- 1994年 講義・パネルディスカッションを中心とした第1回日本小児整形外科学会研修会を開催した。
- 1995年 第2回より会場をコクヨホールに移し、第13回までコクヨホールで開催した。
- 2004年 小児整形外科テキストを刊行した。
- 2007年 小児整形外科手術テクニックを刊行した。
- 2010年 日本整形外科学会7地区+北陸地区でのベーシックコースの研修会の体制の整備した。



地方会開催歴 (2017/9-2019/2)

北海道地区 1回 東北地区 3回
 関東地区 2回 中部地区 3回
 北陸地区 2回 近畿地区 3回
 中国四国地区 4回 九州沖縄地区 4回



2012年 夏季研修会をアドバンスドコースとして位置付け、地方会との差別化を図った。
 ハンズオン、ビデオレクチャー、year reviewセクションを新たに設立した。



ハンズオン スポーツエコー



DDHに対するリーメンビューゲル法 DDHに対するギプス治療



先天性内反足に対するPonsteti法



Year Review

2016年 小児整形外科テキスト第2版を刊行した。
 ホテルで研修会を開催することにより、ランチョン・イブニングセミナー、また
 実際の臨床現場に即したエラスティックネイルによる骨折治療、関節鏡などの
 ハンズオンが可能となった。

2019年 骨折、足関節疾患、股関節エコー、DDHなどの日常的に遭遇する疾患のみならず
 骨系統疾患、脊椎疾患、虐待まで広範囲に小児整形外科分野を網羅した内容であった。



Year Review



シンポジウム

ハンズオン 股関節鏡



ハンズオン
エラスティックネイル



ビデオレクチャー

今後の展望

本邦では少子化が進み、小児整形外科学会員数が漸減している(右図)。しかしながら直近5年では夏季研修会出席者数は増加傾向にあり、
小児整形を志す若手医師の本研修会に対するニーズは大きいと思われる。
 本研修会委員会の使命は充実した夏季研修会プログラムを作成し、また地方会との連携を強固にすることによって**小児整形外科医を養成することである。**



健診委員会の歴史

担当理事 大谷卓也 委員長 服部 義

発足まで

日本小児整形外科学会（JPOA）・日本小児股関節研究などでDDH診断遅延例が多くなっているとの報告。2012年6月に日本小児股関節研究会に乳児股関節健診あり方検討委員会が発足（委員長：朝貝芳美、委員：大谷卓也、北 純、品田良之、薩摩眞一、服部 義、二見 徹）。JPOAのマルチセンタースタディ(MCS)委員会による2013年7月DDH全国調査（事務局 服部 義）にて、全国医療機関1987施設へのアンケートと症例調査。回答 783 施設（39%）、未整復のDDH 1295例中199例（15%）が1歳以上の診断遅延、そのうち36例は3歳以上の実態が判明。

発足

2018年8月 乳児股関節健診あり方検討委員会を発展的に解消し、JPOA内に特別委員会として健診委員会を発足させ、業務を引き継ぐことをJPOA理事会のメール審議で決定。委員会の目的はまず乳児股関節健（検）診システム再構築を進める、将来的には、当学会と関連のある各種の健診、検診についての活動を含めることとした。

活動内容

I 乳児股関節健診における推奨項目導入の啓発（健診あり方検討委員会活動）朝貝芳美シニアアドバイザーを中心に、日本整形外科学会・日本小児科学会の会員のホームページに「乳児股関節健診推奨項目と二次検診への紹介」「整形外科

医のための乳児股関節二次健診の手引き」などを掲載。「乳児健康診査における股関節脱臼一次健診の手引き」を考案、国にも働きかけ、2015年12月厚生労働省から都道府県母子保健主管部を通して各地方自治体に、問診を含めた乳児股関節健診推進の事務連絡。

II 推奨項目導入にともなう二次検診増加に対する対策

各都道府県別に健診体制の構築。大谷卓也理事長から日本臨床整形外科学会（JCOA）へ協力依頼。JCOA理事会にてJPOAとの協力による健診体制再構築の方針を正式承認

①JPOAとJCOAのそれぞれのDDH健診体制都道府県代表担当者リストの作成

JCOA側健診体制 都道府県代表1名のリスト完成

JPOA側健診体制 都道府県代表1名のリスト完成

②現在JPOAとJCOAの各県代表が協力して2019年末までに全国の都道府県別にDDH二次検診可能施設リストを作成するように活動している。

今後の方針

①都道府県ごとの地域保健センターにDDH二次検診可能施設リストをJPOA・JCOA名で提出。推奨項目による一次健診システムのさらなる啓発と実践を促進。

②一次健診医（小児科医が中心）、二次検診（整形外科）医の診断レベルの維持のための再教育（教育スライドなど作成）。

③国・地方自治体に対しての働きかけを継続的に行う。

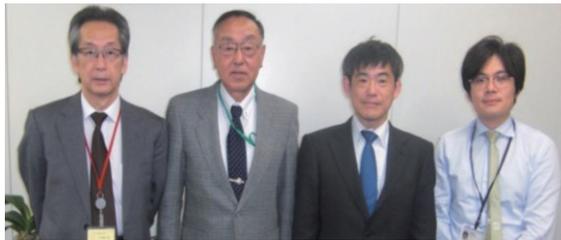
大谷卓也理事長・朝貝芳美シニアアドバイザーによる国への働きかけ。一次健診スクリーニング方法（健診マニュアル）の標準化とその周知。標準化した一次健診フォーマットでの国によるビッグデー

の収集と分析。

④新生児期の助産師・保健師訪問（赤ちゃん訪問）やエコー使用などによる更なる予防の啓発・早期発見システム構築の検討。



2019年4月4日 朝貝芳美シニアアドバイザーが日本医療機能評価機構河北博文理事長と自民党厚生労働部会長小泉進次郎議員と乳児股関節健診の現状と課題について面談



2019年4月23日 大谷卓也理事長と朝貝芳美シニアアドバイザーが厚労省母子保健課小林秀行課長、梅木課長補佐と面談

初代委員会メンバー；

担当理事：大谷卓也 委員長：服部 義

シニアアドバイザー：朝貝芳美、北 純

アドバイザー：薩摩眞一、品田良之、二見 徹

委員：高橋大介（北海道）、落合達宏（東北）、江口佳孝（関東）、

瀬川裕子（関東）、村上玲子（甲信越）、櫻吉啓介（北陸）、

若林健二郎（東海）、藤原憲太（近畿）、岡 佳伸（近畿）、

星野弘太郎（中四国）、金城 健（九州 沖縄）

委員会開催

第1回 2018年 12月14日（金）ウイंकあいち

第2回 2019年 5月11日（土）パシフィコ横浜

第3回 2019年 6月29日（土）長崎大学医学部 専斎ホール

広報委員会の軌跡

広報委員会は平成16年に日本小児整形外科学会のホームページを作成する目的で開設されました。

歴代委員長に聞く広報委員会の変遷

初代委員長 藤井敏男先生（平成16年から）

福岡市立こども病院（現 公益財団法人 福岡県肢体不自由児協会 理事長）



平成16年に私が広報委員会設立を理事会に提案し決議され、私が初代委員長となり、まだ任期期間の規約が無かったのでずっと継続して委員長を務めていました。当時の福岡こども病院長の秘書に依頼しホームページを開発し学会事務局の菊地さんと連携して、まず最新の会員連絡事項などを主体に掲載しました。当時は福岡こども病院医局のPCで毎週更新をしていましたが、私の委員長退任後、清水理事長が就任後に外部に委託することになりました。その当時の事情は私はもう名誉会員になっていたのでもよくわかりません。菊地さんからは、ホームページの更新が外部委託した当初レスポンスが遅くなったと聞いていますが、それは私自身が毎日直接事務局と連携しチェックしていたところにワンクッション入ったからでしょう。情報は新鮮さが大事なので、この点を委員長が留意されると良いと思いますし、古いニュースが残っているのはみっともないと思います。尚、昔の開設当時の資料や写真は福岡こども病院移転で廃棄されており残念ながら残っていません。

広報委員会の立ち上げメンバー：藤井敏男（委員長）、扇谷浩文、北 純、薩摩眞一、品田良之、和田郁男（敬称略）

第2代委員長 扇谷浩文先生（平成21年から）

昭和大学藤が丘病院（現 おおぎや整形外科医院 院長）



私は初代広報委員長を勤められた藤井先生に次いで2代目委員長を拝命致しております。当時「扇谷君頼むよ！君が私の後の広報委員長お願いね」の一言で決まっていたと記憶しております。委員長時代の思い出と言えば、理事であり広報委員でもある北先生との二人での実験的インターネットスクイブによる会議の検討です。夜二人でスクイブを使った話し合いをしていたことを思い出します。しかし実際には委員の皆さんの間でまで使用するに至りませんでした。スクイブの画面の後方に北先生の自宅の部屋を覗きながらこちらは大学の准教授室の一部を北先生に観ていたただきながらの二人だけの会議？でした。それらの内容は「ホームページ上に患者紹介先案内一覧に施設を掲載する件」でした。この際の紹介案内先としてどの様な施設を案内先として許可するのか？といった議論でした。学会ホームページに掲載するには学会として責任のとれる施設でなければならないことから、学会会員が一人でもいっしょとした小児整形外科知識を有した組織であること。その選別法はそしてそれを誰が判断するか？この問題は今各地で問題になっている先天股脱の二次検診依頼を推奨する施設を一般の患者様に向けての案内する際の基準をどの様にするか？と相通じる問題でした。この問題が簡単に結論でないままでいたため北先生と引き続き二人で会議となった次第です。その後3代目の高村委員長には大変な苦勞をお掛けして、ホームページを再作成して頂きました。今もなお刻々と変わりつつある施設における人事異動の問題は残っていると思われます。すなわち病院に於いて医師の異動に伴って先に述べた会員がいなくなったらその施設は紹介先から抹消するのか？といった問題です。

現状はかなりしっかりとしたホームページに仕上がっております。これからも移り変わっていく内容の更新は大変かと思いますが、頑張っていたきたいと思います。

第3代委員長 高村和幸先生（平成24年から）

福岡市立こども病院



平成21年に委員長が藤井先生から昭和大学藤が丘病院の扇谷浩文先生に代わり、福岡市立こども病院がホームページを管理しているため私が藤井敏男先生の代わりに委員になりました。平成24年度に私が委員長になると同時に、他の委員が全員交代になり新しい委員会（注）が立ち上がりました。ホームページは当初福岡市立こども病院で管理していたのですが、清水理事長のご配慮で平成24年度より、ホームページを刷新し、JPOA事務局にて管理するようになりました。新しいHPでは会員のページを作成し、登録していただいた会員に種々の情報を提供することを企画し、会員名簿の閲覧や学会誌のバックナンバーの掲載を行いました。またホームページ上で種々の学会や研究会関連の開催などの通知や日本小児整形外科学会の会員の所属する医療機関の紹介など、医師や一般の方々などにも有用な情報を掲載しています。またスポーツ委員会が作成した成長期のスポーツ障害の掲載や、DDHの検診についての資料も閲覧できるように配慮しました。

発足当初はWEB会員の登録が少なかったのですが、現在は増加傾向にあり喜ばしい結果となってきています。また日本小児整形外科学会の会員の所属する医療機関も、会員の方々に手を挙げていただいで掲載する方式だったため、なかなかすべての都道府県を網羅することが難しかったのですが、空白になっている県の先生方をお願いして登録をさせていただき、現在すべての都道府県に小児整形外科学会の会員が所属する医療機関を見つげられるようになりました。整形外科の医師にとっても、患児家族にとっても有用な情報になっているのではないのでしょうか。

(注) 新しい広報委員会委員：伊部茂晴、倉 秀治、二井英二、藤原憲太、三谷 茂 (敬称略)

現在の広報委員会担当理事 赤澤啓史先生 旭川荘療育・医療センター



2016年5月より高村先生の後任として、藤原先生が委員長、私が担当理事と言う形で努めさせていただいております。私が担当理事になった年に、日本小児整形外科学会総会からスペシャルデーの中のシンポジウム・パネルディスカッション案についてJPOAから2-3題の提案をするようにという依頼がありました。理事会においてどこの委員会が担当になるかという議論があり、新理事である私が担当するよという事で、広報委員会が引き受けることになった次第です。その後の委員会、委員の皆様からいくつかの提案をいただき、学会期間中に高名な先生に案をいただき、期限に間に合いました。その後も、総会の前年の秋に依頼があり、年明けまでに案を出すよというメールが来ます。評議員に一斉メールを送りますが、ほとんど反応がありませんので、委員会で検討し、理事会に諮るという段取りですが、今年は例年以上に早く依頼があり、10月には総会から採択通知が来ました。今までは毎年提案している案を2個以上は採用していただいています。シンポジウムの案と言っても、タイトルだけでなく、座長、演者と演題名なども案として出さないとけないので、大変です。ただ、全てが提案通りにはならないこともあります。それと、ホームページに関しては、長年同じだった表紙を少し変えたりして、一般の方が見やすいように保護者の方へというボタンを入れたり少しずつ工夫を重ねています。わかりづらいかもかもしれませんが、マイナーチェンジはしています。現在は、ネットでも調べられるよになり、我々の病院を受診する時には、ネットである程度の知識を持っておられることも少なくない時代になりました。しかし、世の中にはあまりにも多くの情報が溢れていて、その中には医学的に正しい情報ばかりではなく、間違ったものもあり、それを信じた結果とんでもない方向に進んでしまい、取り返しのつかないことになる場合も予想されます。今後は、学会として親御さんや一般の方へ、我々の仕事を少しでも理解してもらえるよに、小児整形外科が扱っている疾患に関する説明なども徐々に充実していく所存です。引き継いだ時のホームページでは、小児整形外科学会会員の勤務する医療施設の登録が47都道府県に達していなかったということもあり、至急登録していただくよをお願いしたこともありました。

第4代委員長 藤原憲太 (平成28年から) 大阪医科大学



担当理事である赤澤先生の協力的なサポートのもとに現委員会は動いています。今回、このような機会に歴代委員長の談話をいただいて、ご担当いただいた歴代委員の先生方が相当なご苦労をされて、現在の広報委員会とHPが出来上がってきたことがわかりました。今後もJPOAの活動を広く発信するだけでなく、会員への情報提供、さらには患者やその家族への情報の発信基地として広報活動に邁進いたします。

現在の広報委員会

担当理事 赤澤啓史 委員長 藤原憲太
委員：柿崎 潤 金城 健 後藤昌子 徳山 剛 戸澤興治 盛島利文
(敬称略)

SPECIAL THANKS 学会事務局 菊地三恵様
HP担当 那須亮一郎様「オフィスダウンロード」



日本小児整形外科学会 国際委員会の軌跡

委員： 中島康晴（委員長） 稲葉裕（副委員長） 青木清 岡田慶太 金子浩史
金城健 西須孝 瀬川裕子 藤原憲太 山口亮介 渡邊英明
アドバイザー：山室隆夫 国分正一 藤井敏男 亀ヶ谷真琴

歴代委員長	初代	1996-	浜西千秋	4代目	2016-	中島康晴
	2代目	2004-	亀ヶ谷真琴	5代目	2019-	西須孝
	3代目	2010-	川端秀彦			
委員会	10-15名の委員で構成					

海外→日本

フェロウシップ プログラム

日本→海外

Yamamuro-Ogihara Fellowship 1990-



山室隆夫名誉会員と荻原一輝先生により、先天股脱予防普及会からの基金によって、東欧・東南アジア諸国から若手整形外科医師を招聘していました。2002年に本会がフェロウシップを継承しました。これまでに45名のフェローを招聘しています。

Asian Fellowship 1999-

本会とアジア諸国との交流のために、1999年に創設されました。アジア諸国から若手医師を選抜し本会学術集会への招待や小児施設での研修を行っています。これまでに72名のフェローを招聘しています。

Matsuo Fellowship 2008-2017



2006年に福岡市で開催された本会学術集会会長藤井敏男名誉会員よりフェロー基金として寄贈を受け、松尾隆名誉会員が行っている脳性麻痺治療体系の外国からの臨床研修希望者を援助する目的で2008年に創設されました。10名のフェローを招聘し2017年に終了しました。

KPOS-TPOS-JPOA Exchange Fellowship 2003-

2003年からJPOAとKPOS(Korean Pediatric Orthopaedic Society)はExchange fellow1名を選出し、毎年日韓の交流を行っていました。2008年からはTPOS (Taiwan Pediatric Orthopaedic Society) が加わり、日本、韓国、台湾の3カ国間でフェローを交換しています。日本からは、本会学術集会での最優秀英文ポスター賞受賞者がフェローとして選出されます。2016年からは各国の学会を代表するSenior fellowを同時期に派遣するExchange Knowledge Programが開始されました。これまでに21名のフェローを招聘ならびに派遣しています。

Murakami-Sano-Sakamaki Asia Visiting Fellowship 2004-2013



アジア諸国の小児整形外科施設における研修、あるいは現地での小児整形外科医療活動に対する指導・支援を通じ本会が国際貢献に寄与することを目的としています。

2001年に仙台市で開催された本会学術集会会長国分正一名誉会員より基金の寄贈を受け、故村上實久・佐野精司両名誉会員の功績を讃えて2003年に創設されました。また2008年に東京で開催された本会学術集会会長坂巻豊教名誉会員より追加寄贈を受け、2010年より名称が変更されました。日本から16名のフェローを派遣し2013年に終了しました。

Iwamoto-Fujii Ambassador 2012-



2012年に福岡市で開催された本会学術集会会長岩本幸英名誉会員より基金として寄贈を受け、本会の国際化に多大な貢献をされた藤井敏男名誉会員との連名で創設されたフェロウシップです。

本会の国際化および国際貢献を目的とし、フェローは本会を代表して我が国の小児整形外科を諸外国に広め、諸外国から知見を吸収して、国際交流・相互理解を深める役割を担います。これまでに日本から6名の小児整形外科医師を派遣しています。

Kokubun-Kita Fellowship 2020-



本邦の若手小児整形外科医に対して、諸外国の小児整形外科施設での研修および医療に関する情報交換を行う機会を支援することで、本会の国際化および国際貢献に寄与することを目的としています。

2016年に仙台市で開催された本会学術集会会長北純名誉会員より基金寄贈を受け、本会の国際化に多大な貢献をされた国分正一名誉会員との連名で創設されます。

YO fellows



国際フェロー

36 カ国 **195** 名
海外→日本 **151** 名
日本→海外 **44** 名

IF ambassador



ヨーロッパ 11カ国

アジア 18カ国

アメリカ 4カ国

アフリカ 2カ国

オセアニア 1カ国

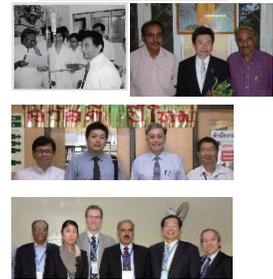
Asian fellows



Exchange fellows



MSS fellows



日本小児整形外科学会は発足時より積極的に国際交流を進めてきました
国際委員会は今後もさらなる海外との交流をサポートします

財務委員会の軌跡

担当理事・委員長：松本守雄

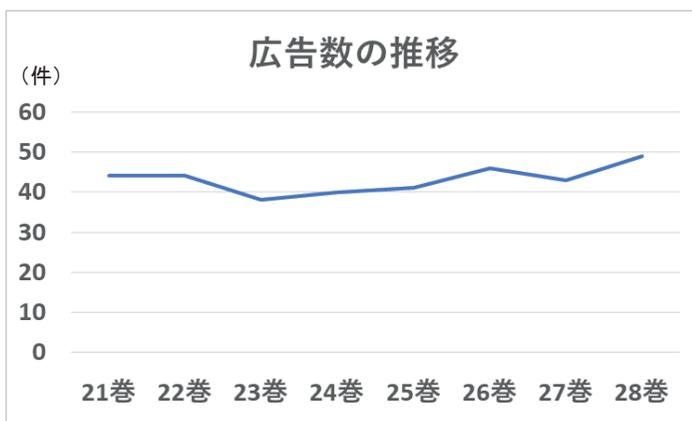
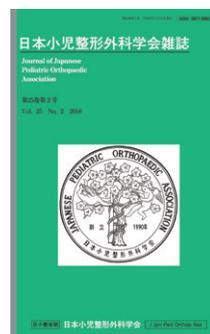
委員：池上博泰，志村 司，中村直行，的場浩介，宇野耕吉，森岡秀夫
スーパーバイザー：理事長：大谷卓也， 副理事長：薩摩真一， 鬼頭浩史

【財務委員会発足の経緯について】

2011年に学会の財務状況を改善することを目的に設置された。大関 覚先生が初代担当理事と委員長を兼務され、発足時の委員は4名（稲垣克記，佐藤啓二，柳田晴久，松本守雄）であった。（敬称略）

【財務委員会の活動】

学会の財務状況改善のため、主に学会誌への企業広告掲載を活動の中心とし、本委員会委員の専門領域である、上肢、下肢、脊椎、腫瘍の分野ごとに、各々関連のある企業に働きかけ、広告掲載を進めてきた。また、本委員会外の多くの理事の先生方にも、地元の企業などへの働きかけなど、広告掲載活動へのご協力をいただき成果を上げてきた。



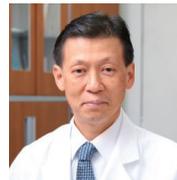
【財務委員会の現況と課題】

2012年頃から始まったジェネリック医薬品の推進などが製薬企業の業績を圧迫し、経費の削減などから学会誌への広告掲載は減少傾向にある。2014年から、これらの問題に対応するため、委員を3名増員して活動を強化している。しかし、製薬業界の厳しさは、近年さらに増しており、学会の財務改善を広告掲載のみに求めることには限界があったため、2016年から賛助会員の募集も開始した。幸いにも7社の応募があったが、本年に入り辞退が相次ぎ、広告事業と同様の理由で厳しい状況にある。今後、学会収支を明瞭化し、納税などへの対応が可能となるように、別会計となっている学術集会、研修会の会計を、学会会計に組み入れることも検討している。

【財務委員会委員歴】



初代委員長
大関 覚



第二代委員長
松本守雄

- 2011年度 理事：大関 覚 委員長：大関 覚
委員：松本守雄，稲垣克記，佐藤啓二，柳田晴久
- 2012年度 理事：大関 覚 委員長：大関 覚
委員：松本守雄，稲垣克記，佐藤啓二，柳田晴久
- 2013年度 理事：大関 覚 委員長：大関 覚
委員：松本守雄，稲垣克記，佐藤啓二，柳田晴久
- 2014年度 理事：大関 覚 委員長：大関 覚
委員：松本守雄，稲垣克記，佐藤啓二，柳田晴久，北 純
池上博泰，志村 司
- 2015年度 理事：大関 覚 委員長：大関 覚
委員：松本守雄，稲垣克記，佐藤啓二，柳田晴久，北 純
池上博泰，志村 司
- 2016年度 理事：松本守雄 委員長：松本守雄
委員：稲垣克記，柳田晴久，北 純，池上博泰，志村 司，土谷一晃
アドバイザー：大関 覚
- 2017年度 理事：松本守雄 委員長：松本守雄
委員：北 純，池上博泰，志村 司，土谷一晃，的場浩介，中村直行
アドバイザー：大関 覚
- 2018年度 理事：松本守雄 委員長：松本守雄
委員：北 純，池上博泰，志村 司，土谷一晃，的場浩介，中村直行
アドバイザー：大関 覚
- 2019年度 理事：松本守雄 委員長：松本守雄
委員：池上博泰，志村 司，的場浩介，中村直行，宇野耕吉，森岡秀夫
スーパーバイザー 理事長：大谷卓也 副理事長：薩摩眞一，鬼頭浩史

(敬称略)

社会保険委員会の軌跡

社会保険委員会は2003年に開設された

歴代委員長

初代委員長 佐藤 雅人先生（2003～2008）
（埼玉県立小児医療センター整形外科部長）



JPOAからの診療報酬に関する要求は、日本小児期外科系関連学会協議会（JAPSS）を通して行う方針とした。

第2代委員長 朝貝 芳美先生（2009～2014）
（信濃医療福祉センター 所長）



初代佐藤委員長の仕事を継続・発展させて、様々な診療報酬アップに貢献した凄腕委員長。
現在も委員会のアドバイザーとして小児医療関係者のためにもご尽力をいただいている。

第3代委員長 吉川 一郎（2015～）
（自治医科大学とちぎ子ども医療センター小児整形外科）



診療報酬上昇がもう望めない現在、極めて無力な委員長職務の継続に鬱々と悩む日々。今後、国からの「診療報酬ダウン要求」に対抗する手段と説得データを今から準備する必要があると感じている。

これまで（朝貝委員長までの）の 当委員会による診療報酬増点要求とその結果

赤字は要求が認められた内容

- 1：6歳以下のギプス加算を要求 → 見事に採用!
- 2：先天股脱での観血的整復（OR）＋骨盤骨切り術時の別算定 → 不採用
- 3：小児科療養指導料の算定は小児科医に限られている。整形外科でもさまざまな疾患の患者さんに対して指導を行っており、小児療養指導料を整形外科医も算定できるようにしてほしい → 不採用
- 4：先天性股関節脱臼の観血的治療整復術は手術難度をDからEに上げる → 不採用。
- 5：先天性内反足の軟部組織解離術、先天股脱観血整復手術、脳性麻痺および二分脊椎下肢の腓形成術の基本点数加算を希望する
→ 内反足手術のみが「内反足手術（手術内容条件付き）」として高得点で採用。
先天股脱観血整復手術の増点のみいまだに要求中である。
- 6：小児のK932の創外固定加算の要求として、K046骨折・K058の骨長調整（骨延長）だけでなく、K075～K078, K100～K110（手指、足趾の形成ならびに再建手術など）も適応に含めて欲しい→**K046骨折・K058の骨長調整（骨延長）のみ採用**。それ以外は不採用
- 7：小児整形外科領域では、先天性の変形に対する矯正骨切り手術をしばしば行っている。ところがK057の変形治療骨折矯正手術と比較して、先天性変形という項目がないため、点数が低いK054（K057の前腕下腿が16300点であるのに対し、K054の前腕下腿は12200点であるので増点を要求する
→ 採用！先天異常による骨の変形を矯正することを目的とする骨切り術については本区分の所定点数により算定する。
先天異常による上腕又は前腕の骨の変形を矯正することを目的とする骨切り術において、患者適合型の変形矯正ガイドを用いて実施した場合は、
患者適合型変形矯正ガイド加算として、6,000点を所定点数に加算する。

特別企画 委員会 30 年の軌跡 日本小児整形外科学会 スポーツ委員会

発足の経緯と活動内容

スポーツ委員会は、平成18年（2006年）に当時、日本小児整形外科学会・理事で京都府医師会スポーツ医科学委員を務められていた日下部虎夫先生（現 京都第二赤十字病院 名誉院長）の提案から発足し、以下の目的に活動を開始されました。

- 1) 成長期におけるスポーツ傷害と外傷の予防対策と啓発活動を進める。
- 2) 成長期スポーツ傷害の実態調査を行う。

主な事業

1. 小児整形外科学術集会でのスポーツ関連のシンポジウムかパネルディスカッションのテーマを毎年提出しシンポジストやパネリストも推薦。
2. スポーツ関連医学会への成長期スポーツ障害に関する演題発表やパネルのテーマや座長の提案。
3. 小児スポーツに係る啓発冊子を作成（久光製薬協賛による出版）
これらの活動を通じてスポーツドクターの先生方や一般の方々へのスポーツ障害予防の啓発を行う事とし活動を開始。

発足時委員メンバー

日下部虎夫 初代委員長 平成18年～21年
 高山真一郎 第2代委員長 平成22年
 山下俊彦 第3代委員長 平成23年～27年
 赤澤啓史、一戸貞文、高村和幸、戸祭正喜、鳥居 俊

第1回スポーツ委員会の議事録 2006年12月1日開催 場所：九州大学医学部百年講堂2階

<p>日本小児整形外科学会平成18年度第1回スポーツ委員会 開催日：2006年12月1日（金）16:50～17:50 場 所：九州大学医学部百年講堂2階会議室3</p> <p><議題> 1 スポーツ委員会発足の経緯について(日下部) 2 スポーツ委員会の活動方針と事業計画 3 第18回日本小児整形外科学会パネルディスカッションのテーマと議題の選出 4 その他</p> <p>スポーツ委員会 委員長 日下部虎夫 京都第二赤十字病院整形外科部長 委員 赤澤啓史 社会福祉法人加山荘健康センター療育課 副院長 一戸貞文 法華医科大学整形外科教授 高村和幸 福岡市立こども病院・感染センター整形外科部長 高山真一郎 国立成育医療センター整形外科部長 戸祭正喜 兵庫医科大学整形外科助手 鳥居俊 早稲田大学スポーツ科学学術院助教授 山下敬彦 札幌医科大学整形外科教授</p>	<p>日本小児整形外科学会スポーツ委員会の目的と活動方針（各委員からの提案）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地道なフィールドワークによる実績 ・練習方法などの指導（本人、保護者） ・スポーツ障害の予防活動（メディカルチェック） ・スポーツ傷害の現場に関するスポーツ指導者と医療従事者への指導 <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ指導者への啓蒙 ・スポーツ種目別の指導者への啓蒙 ・学校教員（養護を含めて）、指導者への知識提供、啓蒙 <ul style="list-style-type: none"> ・学校スポーツへの関与（学校医の問題） ・学校体育への関与（小児の体力低下、肥満、ケガの増加など） <ul style="list-style-type: none"> ・年少者の競技専門トレーニングの弊害（データ集積の必要性） ・ジュニア・エリート競技でのスポーツ障害の実態調査 <ul style="list-style-type: none"> ・こどものスポーツと心身の健康 <ul style="list-style-type: none"> ・学会での小児スポーツの問題に関するシンポジウムなどの開催 ・有名人の治療経験を学会としてフィードバック ・公開セミナー（指導者や選手対象）の開催 ・パンフレットの作成（発育期のスポーツ障害に関する） <p>・他のスポーツ委員会との連携と統合</p>	<p>スポーツ委員会活動方針（案）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 小児のスポーツ傷害に関する諸問題 <ol style="list-style-type: none"> 1) スポーツ傷害（外傷、障害）の実態調査 2) 啓蒙活動と指導（予防、治療） 対象：指導者、本人、家族、教員、医療従事者 方法：(1) 講演会、セミナー、研究会などの開催 (2) 学会でのパネルやシンポの開催 (3) パンフレットの作成 (4) その他 2 学校スポーツの諸問題（体力低下、肥満、ケガの増加など）への対応 <ol style="list-style-type: none"> 1) 実態調査 2) 教職員への指導と啓蒙 3) 整形外科医の学校医への参入 4) 学校での適切なスポーツメニューの作成と指導 5) その他 3 年少者の競技専門トレーニングの問題への対応 <ol style="list-style-type: none"> 1) スポーツ障害の実態調査 2) 適切なトレーニングメニュー（種目別）の作成 3) 啓蒙と指導 4) その他 4 他のスポーツ委員会との連携 (各種学会スポーツ委員会、医師会スポーツ科学委員会など) <ol style="list-style-type: none"> 1) データの共有 2) 総会会議（本委員会の意義とあり方） 3) その他
---	--	--

年表

2006年(平成18年)	2008年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
<p>スポーツ委員会発足</p> <p>初代委員長 日下部 虎夫先生 就任</p>	<p>白仁田 厚先生 委員就任</p>	<p>桶谷 寛先生 委員就任</p> <p>第2代委員長 高山 真一郎先生 就任</p>	<p>小冊子『成長期におけるスポーツ障害』発行 協賛：久光製薬</p> <p>第3代委員長 山下 敏彦先生 就任</p>	<p>内尾 祐司先生 委員就任</p> <p>森原 徹先生 委員就任</p>	<p>『子どものスポーツ障害診療ハンドブック』発行 中外医学社</p> <p>佐竹 寛史先生、島村 安則先生 委員就任</p>	<p>第4代委員長 田中 康仁先生 就任</p> <p>田中 康仁先生 委員就任</p>

発足から現在に至るまで、各スポーツ医学会でのパネルディスカッション、シンポジウムの企画を行って参りました。



今後の活動予定

1. 今後も日本小児整形外科学会、日本臨床スポーツ医学会、日本整形外科スポーツ、日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会などのスポーツ医学会にたいし、シンポジウムやパネルディスカッションの企画を行う。
2. さらに多くの女性整形外科医にスポーツ医会に参画していただく。
3. 小児整形外科疾患罹患後のスポーツ活動についてのアンケート調査。
4. 運動器検診後の運動機能障害に対する指導書の作成。
5. 障害者スポーツを拓げていく。

現委員メンバー

田中康仁 第4代委員長
 委員：鎌田浩史、琴浦義浩、佐竹寛史、島村安則、森原 徹、
 山本祐司、藤井宏真
 アドバイザー：内尾祐司、戸祭正喜、鳥居 俊

特別企画「委員会の軌跡」編集委員会 担当理事 / 委員長 落合 達宏

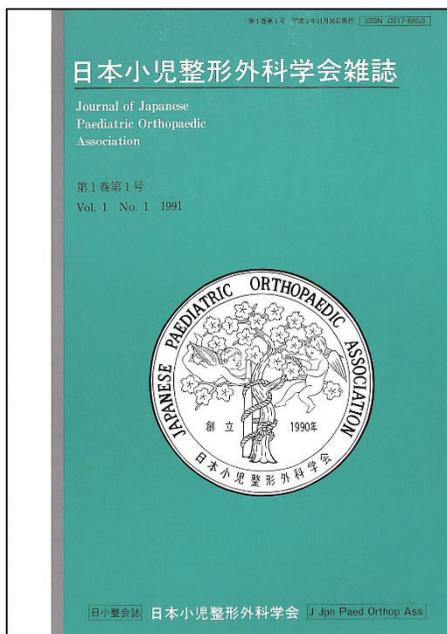
【はじめに】

編集委員会は日本小児整形外科学会の各種委員会の中でもっとも長い歴史をもっています。

日本小児整形外科学会雑誌第1巻第1号は、初代の吉川委員長以下14名の委員の努力により、第1回学術集会翌年の平成3年（1991年）11月30日に発刊されました。本号には43編の原著論文が掲載され、明るい緑色の中央に学会ロゴをあしらった表紙のデザインは現在の機関誌にも引き継がれています。

編集委員会は2代委員長佐野精司先生以下19-21名の委員（H6-H9）、3代委員長石井良章先生以下21-22名の委員（H9-H13）、4代委員長中村耕三先生以下20-28名の委員（H13-H19）と引き継がれました。編集委員会が徐々に大所帯になってきたため5代荻野利彦委員長（H19-H22）の時代は、編集委員を12名に絞り、補佐的に査読を担当する約20名の査読委員を配置していました。平成22年に高山真一郎先生、平成27年に町田治郎先生が委員長となり、約20名の編集委員が主査を担当し、一般評議員に副査をお願いするという形式で査読を行っています。

	委員長名	就任年
初	吉川 靖三	H3
2	佐野 精司	H6
3	石井 良章	H9
4	中村 耕三	H13
5	荻野 利彦	H19
6	高山 真一郎	H22
7	町田 治郎	H27
8	落合 達宏	H31(R1)



日本小児整形外科学会雑誌
第1巻第1号
平成3年(1991年)11月30日発刊

第1巻より年2回の発刊でしたが、第6巻からは学術集会抄録集を第3号として加えるようになり現在に至っています

編集委員会歴代委員長
平成3年(1991年)設立
各種委員会のなかでもっとも
長い歴史を有する

投稿

受稿

査読者選定 (主査 編集委員、副査 評議員)

査読依頼 → 査読承諾 → 査読完了

判定

採用 / 訂正 / 不採用 → 査読レポート

改稿

改稿受講

再査読者選定 (主査 編集委員、副査 評議員)

再査読依頼 → 査読承諾 → 査読完了

判定

採用 / 訂正 / 不採用 → 査読レポート

査読 peer review :

「専門家どおしの評価・判断」

- ・既存の知見との整合性
- ・内容の向上
- ・投稿規定のチェック
- ・スペルミスのチェック

査読の流れ

現在はすべての流れが論文査読システム (三美印刷) による Web上の作業になっている



【謝辞】

日本小児整形外科学会雑誌の査読を担当していただいた先生がたへ感謝を申し上げますとともに今後の運営へのご協力をお願い申し上げます

編集委員会の歴史についてご指導いただいた前任委員長の高山先生、町田先生、事務局の菊地さまに感謝申し上げます

遠藤 直人

岡野 邦彦

落合 達宏 (委員長)

川野 彰裕

北野 元裕

日下部 浩

小林 大介

西須 孝

神野 哲也

関 敦仁

平良 勝章

高村 和幸

徳山 剛

三澤 晶子

横井 広道

渡邊 英明

町田 治郎 (アドバイザー)

編集委員

平成31年(令和1年)

委員の任期

は6年で交代

になる

マルチセンタースタディ委員会の軌跡

マルチセンタースタディ委員会は平成11年(1999年)に設立され、初代委員長として、藤井敏男先生が就任されました。委員会設立の趣旨は、『日本国内の小児整形外科疾患について学会主導の多施設共同臨床研究を実施し、該当疾患についてのデータ収集・解析から小児整形外科疾患罹患の診断・治療に貢献すること』、です。この趣旨に従い、マルチセンタースタディ委員会は、野口康男先生らによる疫学調査「日本における大腿骨頭すべり症の疫学」を皮切りに、これまでに代表的な小児整形外科疾患に関する全国調査を行い、数々の優れた論文を報告してきました。

これまでに実施した全国調査は以下の疾患です。[調査対象期間]

- 第1回 大腿骨頭すべり症 [平成9年(1997年)～平成11年(1999年)]
- 第2回 ペルテス病 [平成5年(1993年)～平成7年(1995年)]
- 第3回 Blount病 [昭和55年(1980年)～平成14年(2002年)]
- 第4回 筋性斜頸 [平成11年(1999年)～平成12年(2000年)]
- 第5回 発育性股関節形成不全 [平成23年(2011年)～平成25年(2013年)]
- 第6回 大腿骨頭すべり症(レジストリー研究)
[平成29年(2017年)～令和1年(2019年)] 登録期間を2021年12月末まで延長

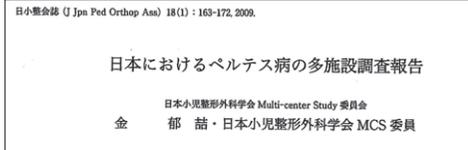
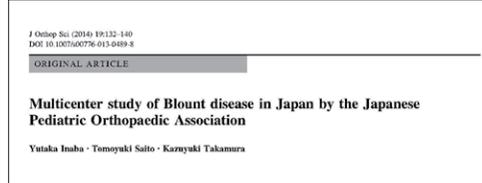
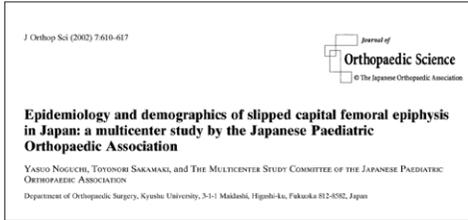
受託研究

脛骨骨形成不全又は偽関節症を伴った神経線維集症 I 型(NF1)の疾患状況および治療経過に関する多施設共同調査[アレクシオンファーマ合同会社からの委託、データ収集期間2017年6-8月、7施設26症例]

論文発表

1. Noguchi Y, Sakamaki T, and The Multicenter Study Committee of the Japanese Paediatric Orthopaedic Association. Epidemiology and demographics of slipped capital femoral epiphysis in Japan: a multicenter study by the Japanese Paediatric Orthopaedic Association. J Orthop Sci 2002, 7(6): 610-617.
2. 野口康男, 坂巻豊教, 日本小児整形外科学会Multicenter Study委員会. 日本における大腿骨頭すべり症の疫学. 日小整会誌. 2004, 13(2): 235-243.
3. Kim WC, Hiroshima K, Imaeda T. Multicenter Study for Legg-Calvé-Perthes disease in Japan. J Orthop Sci 2006, 11(4): 333-341.
4. 金 郁喆, 日本小児整形外科学会Multicenter Study委員会. 日本におけるペルテス病の多施設調査報告. 日小整会誌, 2009 18(1): 163-172.
5. Inaba Y, Saito T, Takamura K. Multicenter Study of Blount disease in Japan by the Japanese Pediatric Orthopaedic Association. J Orthop Sci 2014, 19(1): 132-140.
6. Hattori T, Inaba Y, Ichinohe S, Kitano T, Kobayashi D, Saisu T, Ozaki T. The epidemiology of developmental dysplasia of the hip in Japan: Findings from a nationwide multi-center survey. J Orthop Sci 2017, 22 (1), 121-126.
7. 服部 義, 稲葉 裕, 一戸貞文, 北野利夫, 小林大介, 西須 孝, 尾崎敏文. 発育性股関節形成不全(脱臼)の全国多施設調査の結果報告. 日小整会誌, 26(2): 343-351.

(日本整形外科学会員への情報周知のために、Journal of Orthopaedic Scienceから日本小児整形外科学会誌への日本語による投稿の許可を受け掲載)



【今後の活動】 日本小児整形外科学会疾患登録 (JPOALレジストリー)

- アカデミア向けの電子登録システム (REDCap) を採用し疾患登録 (JPOALレジストリー) を行うこととなりました。(運用開始 2020年1月1日)
- 目的は、小児整形外科疾患の発症数、患者動向などの疫学データ、診断・治療に関するデータを収集し、解析結果から各疾患の原因究明、治療法の検討・開発など、小児の健康・福祉の向上に貢献することです。
- 疫学的調査を主たる目的としたA登録は学会会員の努力義務になります。
- 診断・治療法に関する追加調査を行うB登録(追加調査)は学会会員の努力事項です。
- 学会会員は、審査を受けた後に、収集したデータ(個人情報を含まない)を使用することが可能になります。

歴代委員・委員長を以下に示します。(敬称略)
【委員】: 一戸貞文、稲葉 裕、猪又義男、岩本幸英、扇谷浩文、大谷卓也、尾崎敏文、金子浩史、川端秀彦、北野利夫、金 郁詰、国分正一、小林大介、小林直実、西須 孝、齋藤知行、坂巻豊教、関 敦仁、高橋祐子、高村和幸、滝川一晴、中川敬介、中瀬尚長、野口康男、服部義、樋口周久、廣島和夫、星野裕信、本田 恵、村上玲子、和田晃房
【委員長】: 藤井敏男(平成11年~13年)、廣島和夫(平成14~15年)、岩本幸英(平成16年~21年)、尾崎敏文(平成22年~27年)、北野利夫(平成28年~令和2年6月)、関 敦仁(令和2年7月~現在)

委員会の軌跡ポスター作成者: 北野利夫

用語委員会の軌跡

担当理事 羊ヶ丘病院 整形外科 倉秀治
委員長 北上済生会病院 整形外科 一戸貞文

【用語委員会の成り立ち】

用語委員会は、佐藤雅人部会長のもとに2004年(平成16年)に開設された用語検討部会を前身として設立されました。当初は理事会での審議形態をとっていました。平成23年度から用語委員会が設立され、初代の委員長には亀ヶ谷真琴先生が就任されました。平成28年度からは委員長に加えて担当理事も配置されております。

【用語委員会(用語検討部会も含む)のメンバーの変遷】

平成16年度(2004年)－平成22年度(2010年) 委員長：佐藤雅人
委員：亀ヶ谷真琴 日下部虎夫 廣島和夫 藤井敏男 本田恵 山本晴康

平成23年度(2011年)－平成25年(2013年) 委員長：亀ヶ谷真琴
委員：北小路隆彦 神野哲也 平良勝章 松井好人 横井広道 若林健二郎

平成26年度(2014年) 委員長：亀ヶ谷真琴
委員：神野哲也 平良勝章 松井好人 横井広道 若林健二郎

平成27年度(2015年) 委員長：二見徹
委員：亀ヶ谷真琴 神野哲也 平良勝章 横井広道 若林健二郎 和田晃房

平成28年度(2016年) 委員長：一戸貞文 担当理事：一戸貞文
委員：亀ヶ谷真琴 二見徹 神野哲也 平良勝章 横井広道 若林健二郎 和田晃房

平成29年度(2017年) 委員長：一戸貞文 担当理事：一戸貞文
委員：亀ヶ谷真琴 二見徹 若林健二郎 和田晃房 伊藤順一 遠藤裕介 高橋祐子

平成30年度(2018年) 委員長：一戸貞文 担当理事：一戸貞文
委員：二見徹 若林健二郎 和田晃房 伊藤順一 遠藤裕介 北川由香

平成31年度(2019年) 委員長：一戸貞文 担当理事：倉秀治
委員：二見徹 若林健二郎 和田晃房 伊藤順一 北川由香

【歴代委員長】

敬称略



佐藤雅人



二見徹



亀ヶ谷真琴



一戸貞文

【歴代担当理事】

敬称略



一戸貞文



倉秀治

【用語委員会の活動】

平成16年度：

- ①日整会用語集の改定に際して、追加用語の要望要請に対して追加用語(約20)を提出する。
- ②「DDH」の和訳、「发育性股関節形成不全」に対して日整会用語委員会から当学会にアンケート調査の依頼が評議員会にておこなう。101名中、賛57名、否17名。

平成17年度－平成22年度：学会議事録に活動記載無し

平成23年度：

- ①日整会より「整形外科用語集第7版」発行後、第7版の誤植や誤り、また第8版に向けて用語についてのアンケートがあり、委員に意見を出してもらい、回答した。

平成24年度：活動報告記載無し

平成25年度：

- ①日整会用語委員会への回答：開排制限を「limitation of abduction in flexion」
Toddler's fractureを「よちよち歩き骨折《脛骨骨折を言う》」
- ②「白蓋－寛骨臼」に関する日本股関節学会への回答：
acetabular dysplasia：寛骨臼形成不全[症] 白蓋形成不全[症]
acetabular index: 寛骨臼指数、白蓋指数 acetabular labrum: 寛骨臼関節唇、関節唇
《股関節の》 protrusio acetabuli: 寛骨臼底突出[症]、股臼底突出[症] 《Otto 骨盤》
- ③「plantigrade一足底接地」に関する足の外科および日整会用語委員会への依頼
修正案：蹠行性(形) しょうせい 足底接地(形) そくていせっち

平成26年度：

- ①日本小児整形外科学会からの日整会学術用語委員会での要望結果。
(1) plantigrade 蹠行性 ○形 しょうせい足底接地[性] ○形 そくていせっち[せい] 和語を追加する。
(2) Toddler's fracture: 新規収載しない。

平成27年度：①日整会用語集への新規収載希望事項 ②用語の更新希望 ③DDHの国内での呼称と定義について

平成28年度：

- ①継続審議のDDHの正式用語として「发育性股関節形成不全」を採用した。

平成29年度：

- ①日整会からの用語集に関するアンケート
 - (1)新規採用 (a)和語としての「児童虐待」 (b)和語としての彎曲を採用し、それに対する欧語としてbowingを採用する。
 - (2)削除もしくは改めていただきたい項目
 - (a)用語集54ページ：
Child abuse (syndrome) → battered child syndrome について(syndrome)を削除し、child abuseを残し、それに対する和語とし 「児童虐待」を採用する。
 - (b)和語526ページ：彎手、彎足の二つの和語の削除
 - (c)用語集283ページ：tibia valgaとtibia varaについて和語としての「脛骨外彎症」と「脛骨内彎症」を削除
 - (d)用語集154ページ：juvenile rheumatoid arthritis JRAと401 ページ和語としての「若年性リウマチ」、535ページ略語としてのJRAの削除
 - (e)用語集526ページ：severe mentally and physically handicapの削除、403ページの重症心身障害に対する欧語からsevere mentally and physically handicapを削除
 - (3)誤植や誤り 用語集366ページ：
「肩関節穂状ギブス」、377ページ「股関節穂状ギブス」、507ページ「母指穂状ギブス」穂状の読みが「ほじょう」とされているが「すいじょう」が正しい。

平成30年度：向き癖の英語訳 (Turned head) に関して、学術用語でないこと、欧米での文献上

相当する単語がないことより不採用。 Physeal fracture、Physis fractureに関して和訳は不要。

Corner fracture (角骨折) について再審議し、資料を添えて日整会用語集への収録を依頼。

平成31年度：①向き癖の英語訳 (Turned head) は不採用

- ②先天性内反足の英語訳として従来の「idiopathic club foot」に加えて「congenital clubfoot」も追加することを日整会用語委員会に回答

【おわりに】

以上は、日本小児整形外科学会事務局より提供された、評議員会議事録より抜粋したものである。本ポスターの作成に当たり、佐藤雅人初代委員長より貴重な御意見をいただきましたことに、感謝の意を表します。

倫理委員会の軌跡

- **2014年11月26日**：JPOA倫理委員会発足（ヒルトン東京ベイ）
 - 委員長・担当理事：和田郁雄
 - 内部委員：小泉渉・神野哲也・町田治郎
 - 外部委員：陳基明・星川信行・佐久間和子・大友順子

- **2016年5月12日**：第1回倫理委員会（パシフィコ横浜）

研究課題①：大腿骨頭すべり症に関する多施設共同前向き観察研究（レジストリ研究）

申請者：北野利夫（JPOAマルチセンタースタディ委員会委員長）

 - 担当理事：和田郁雄→鬼頭浩史
 - 外部委員：星川信行→春田大吾

- **2016年9月20日**：研究課題①・承認
- **2017年1月31日**：第2回倫理委員会（日本小児整形外科学会事務所）

研究課題②：脛骨骨形成異常または偽関節を合併した神経線維種症（I型）（NF-1）患者を対象とした疾患状況および治療経過の多施設共同研究

申請者：北野利夫（JPOAマルチセンタースタディ委員会委員長）

- **2017年2月13日**：研究課題②・承認
- **2018年5月25日**：研究課題①のデータ収集方法の修正・変更に関する再審査請求

研究課題①：大腿骨頭すべり症に関する多施設共同前向き観察研究（レジストリ研究）

ーREDCapを用いたElectric Data Capturing（EDC）システムによるデータ収集方法の追加ー

申請者：北野利夫（JPOAマルチセンタースタディ委員会委員長）

- 2018年6月9日：上記変更・承認
- 2019年5月9日：第3回倫理委員会（パシフィコ横浜）
 - 研究課題③：日本小児整形外科学会疾患登録（JPOAレジストリー）
 - 申請者：北野利夫（JPOAマルチセンタースタディ委員会委員長）

 - 委員長：和田郁雄（退任）→鬼頭浩史
 - 新委員：渡辺航太

- 2019年9月5日：研究課題③・承認
- 2019年11月20日：任期満了に伴う委員の交代
 - 町田治郎→内川伸一
 - 神野哲也→三谷茂
 - 小泉渉→岡田慶太

（すべて敬称略）

文責：鬼頭浩史（JPOA倫理委員会委員長・担当理事）